

机邊だより

○兒童の圖畫

(タンネル女史著「兒童」より)

如何に遙かに遠き大昔の人々でも華麗なものや稀有なものもしくは珍奇なものを愛し、又自分等の身邊を裝飾する事を好んだものである。現今でも所謂未開の人種の中に、屢々かゝる事實を發見するのである。それで此等の感情を強めるには、數多の動機が聯合されて居るのであつて、例へば異性から稱讚され度いと云ふ願、又は所有權に對する本能即ち總て自分の物にしたいと云ふやうな慾望もあるのである。けれども又、天性的に、自然に、華麗な、そして燦爛たるものを愛するの情があるのである。これが抑々美的感覺の幼芽とも見るべきものである。美術的創造或は發表の起源は、一體何であるかは、今尙盛に論じられる問題である。ところが、此の問題はあまりに實際的價

値から隔てられ、日常生活から遠けられて居るので、多くの人には自然法則ではとても説明する事の出来ない一種の無用事の如くに考へられて居る然し乍らこの美術的創造とか發表とか云ふものが最初は極閑散なる餘裕の産物であることは想像するに難くない。即ちかの元始時代の人々が、彼等の食物の供給が豊かであり、又休息も充分に出來或は狩獵して遊びくらした事や、又かの勇しい戦も昔のことになつたといふが如き、至極氣樂な暇にかぎつて、起つたものであると想像するのは、蓋し最も理由のある事であらう。而して、彼等は獲物を捕へたり、殺したりした事を歌や踊の中に表し、或は又、鋭い石片を以て自分の狩用の小刀の上にそれらを描いたのである。

それで、今述べたやうな興味は兩方とも幼い兒童の中に現はれて居るのである、即ち彼等は華麗なものを貯へて置いて、それで自分等の身のまはり飾る事を好むのである。而して又自分等のいろいろな經驗を、遊戯をしたり圖畫を畫いたりする中に表はすのである。さて、此等の興味の性質

を追索するのが、目下の目的である。兒童の美術的感の問題は當然圖畫、繪畫、模型法、音樂、及び物語りなどを含むのであるが、今此所では單に圖畫と音樂とのみしか研究する事が出來ない。勿論折にふれて、其他の美術の分枝にも觸れるのであるが、而して此所に一つ是非理解されて居なければならぬ事がある、それは、吾人がこれまで扱つてきた凡ての問題に於ける如くに、兒童をして全然成人の感化から隔離する事は到底不可能であると云ふ事である。少くとも兒童の趣味はその家庭にある繪、それからいろいろな家具の恰好とか、衣服の色合形などの影響を蒙るものである。

そして大程兒童が圖畫を畫き初める時分には、成人が畫いたのを手本として畫くので、それによつて大に助けられるのであつて、又兒童自身で畫いたものが成人によつて批評され、且つ稱讚されて進むのである。

今便宜上、圖畫の問題を二部に分けて見やう。即ち第一は圖畫の鑑識で第二は圖畫を實際に畫くことである。第一の部には、兒童の色彩感に就いて得られたる觀察も亦含まれるのであるが、嬰兒はその色が、何色であるか、形が如何であるかには一向頓著せずに、先づ第一は華麗な物體に目を付けるのであつて、そのものが動いて居る場合には特別そうである。

ブライエル氏の男兒は生後二十三日にして華かな日影さした赤い薔薇色の窓掛を見る事を大變に喜んだ、そして二才の時には色を見分けるやうになつたが、其の時分には、赤と黄とが最も好きで空色や緑色には少しも氣をとめなかつた。シン嬢

の姪などもこれと同様であつた。これに反してポルドウィン氏の幼児は、空色が最も好きで白や赤などもこれに次いで好んだ。残念な事にはポルドウィン氏の實驗中には黄色は少しも用ひられて居ないのである。それで褐色は彼の兒にもシン嬢の姪にもあまり好かれも、嫌はれもせぬのである。

此れで兒童には、概して華美な、光輝ある、明るい色彩が喜ばれる事が、大程解るのである。斯くの如くに或る程度までは色の何色であるかには注意せず、どちらかと云へば華かな空色の方が、黒ずんだ赤色とか何でもそう云ふ風な色よりも選ばれるのである。然し此の點に關しては何等特別な證明などはないのである。も一つ此所で注意して置かねばならぬ特性がある、それは兒童が色彩を識別する場合、その大部分を活動する所のものは對照であると云ふ事である。

形體を識別するには最初、運動、色彩及び大きさなどから離れる事は出来ないのである。一般に

兒童は、小さいものを好む傾向がある。それと云ふのは、恐らく自分の力がその物體の力以上であるとか、又はその物體を自分で保護し、愛撫してやる事が出来るかと云ふやうな、大きな物體に對してはとても經驗する事の出来ない感情を味う事が出来るからであらう。で、物體の運動及び其の他すべて兒童の生活に關係ある所の種々なる性質に對すると同様に、形體においても亦物體が自分と同勢力の物を愛し好むと云ふ事は見られないのである、尤もこれは兒童の幼稚な而も一時的の考から起るのではあるが。

サレー氏は、兒童が花を愛すると云ふ事は兒童が美的快樂に最も接近して居るのであると考へて居る。それは勿論兒童各自の性格によつて花のそれぞれ異つた性質が彼等の注意を惹くのであるが、或る兒童は殆ど皆、花の香を喜ぶのであるが、又或者は自分を裝飾すると云ふ點から花を愛するものもある。此のやうに花を愛し好む事は極幼い時分

には男兒も女兒も同様であるが、少し大きくなる
と、男兒は此のやうな事に心を傾ける事を嫌うや
うになるものである。

總て以上述べたやうな事柄は主として兒童の特
性に從ふものである、明るい色もしくは華美な色
の方があつさりした色よりも先に取られ、物の價
値なども利用的の方が美術的よりも優るとせらる
るのである。此れは、かの兒童が景色の美を愛す
る事のいたつて稀であると云ふ事實の中にも表は
れて居る、即ち山岳或は大海の宏壯なるを見ては
單に恐怖の念を生せしめ、又美しいそして愛らし
いものを見ては兒童が自分の特に氣に入つたと云
ふやうな或る點に對する趣味の中に失はれて仕舞
ふのである。

此れは何處まで眞實であるかは知らないが、と
にかくギリシヤ文學中には自然に對する美的鑑識
を語り示して居る章句は誠に少ないのである、海
は不生産であり、又土地と云へば多くは田畑に耕

され、豊饒な、そして森林繁茂して居る如き有様
であつて、形容詞の如きは總て人間に實際的價值
あるや否やを標準として用ひられるのである。

最初、嬰兒は物體の象表に對しては、あたかも
獸類の爲すやうな行動をするのである、例へば鏡
面に映つて居る影を見て眞のものと思ふのであつ
て、これは獸が巧に描かれた繪畫を見て實物と思
つたり又野蠻人が水中に映つて居る自分の影を見
ては自分と同じ者が其處に居るのであると考へる
などと同様である。生後間もなく八ヶ月でさへも
己に或兒童は寫眞を認識する事が出来るのである
をしてあだかも實物に對するやうな考でそれに近
くのである。尤もこの位な時分には物を辨別する
力が餘程明かになつて居る。シン嬢の姪が生後十
四ヶ月の時に幾人が集つて寫つて居る寫眞の中か
ら顔が直徑僅に一時の四分の一、即ち二分程より
なかつたが自分の父を指示したと云ふことである
けれども、斯くの如き認識は、寫眞を寫眞として

認めるのとは大に違ふのである、何故と云ふに、この寫眞を一個の表號もしくは畫いたものとしてはそれ自身には何等の用にも立たぬのである。兒童がかゝる事を知るまでには容易な事ではない、もう四歳にもなつて尙、寫眞に物を食べさせやうとする事が折々ある。或兒童が人々が教會に行くところの寫眞を見てその翌日になつて又それを見た時にも、未だ人々が教會に達して居なかつたので驚き叫んだと云ふ、又シン嬢の姪が三歳の折に一匹の羚羊が野羊仔を驚から防いで居る寫眞を見て自分の手をそれ等の間に置いて野羊仔を防がうとした又彼女が二歳の時に羊仔の上に枝が倒れて居る寫眞を見て其の枝を起さうとした事もある。

以上の事は、かの芝居を見て眞實の事と思つたり、又拵へ物のサンタクロースを本物と思つたりして混雜するやうな、すべてかゝる傾向の中にも見られるのである。それで、兒童が或物が或物の代表物に過ぎないので、それ自身には何等價值も

ない事を知るまでには余程容易な事ではない。符號を用ひる事は故意に得た力であつて自然的のものではない、そして最初は符號とその符號が代表する所の實物の間に種々混同が起つて、而も感情が強ければ強い程余計に混同が劇しくなるのである。此の例は單に兒童ばかりでなく、或人の中、即ち宗教的觀察の中にも屢々發見せらるゝのである。

兒童が既定の年齢において畫と物體との區別を明かに認識なし得ると否とに係はらず、彼等の嗜好は學校教室の裝飾と云ふ立場から見ると又一興ある所である。オーシース氏の觀察した所によるとむしろ張り合がないやうである、彼は兒童は概して美術製作品の描寫などには注意せぬ事を發見した。天然の儘の最も粗造な亞クロム酸のやうな色でも色彩ある繪、それから幼い兒童や動物が遊び戯むれてゐるやうな、所謂可愛らしい繪などはサンタクロースや、「母と子」などを除いては、常

に選ばれた。時折児童に向つて教室内には幾何繪があるかと尋ねて見ると、多くの中から僅に二二三の名稱を挙げ得るばかりであつて、其の他のものは、確かに彼等児童には何等の印象も與へてゐなかつたのである、即ちこれらの繪は實際児童の頭腦以上のものである。若し此等の事が一般児童において眞實とするならば、教室の裝飾に關する問題の如きは決して普通世間の人々の考ふるやうな單純なものではあるまい。

吾人にしてもし資金と、雅致に富んだ繪畫、彫刻を鑑別する丈の智識との賦與があつたならば、裝置完全なる學校を設立する事も出來得るならんと常に企圖つて居るのである。自分が曾て二三の學校に居た事があるが、其所の教師の曰つたのを考へると左程資金もかゝつてはゐないやうであつたが其の割合に、成人の眼にも裝置が驚くばかり美術的であつた、然し其の裝置の完備と云ふ點からして如何程のものを児童が獲る事が出來やうか、

此の問題はやがて幼稚園の教室に關しても起るものであらう。

さて吾人は此所で児童の趣味と云ふ事を考へたらば又新しく得る所もあらう、かのマドンナや其他美しい幼童の繪畫も數多ある、動物界のものにおいては、ランドシーヤ及びローザボンハーの繪は初歩のものとしては好いものであつて、尙其他にも數多ある。敢て吾人の美學の基礎とする所を低くする要はないが、たゞ児童の趣味に應じて主題を變更する事は必要である。而して若し此の事が都合よく遂行されたならば、従つて第八學組で用ひる繪の主題は幼稚園におけるそれとは大に異なる所があつて、兩方とも單に教師の趣味に合ふものばかりを用ひる如き事はない筈である。

リユッケン氏は更に實際的方面からして繪畫に對する嗜好を觀察した。彼は児童は特に自分等に關係ある物語りの繪を興味をもつて居る、そして折々は、單に其の繪の話丈をきかされても興味を

起すものであると曰つて居る。故に彼は初學の兒童においては繪畫は彼等の好奇心を刺戟し、如何したならば、其の繪を了解する事が出来るか、それを知りたいと思はせるものである事を暗に示してゐる。

兒童の創造力或は發明力に關しては、彼等の圖畫以外に多くのものをも含まなければならぬが今此所では其の他のものは論ずる事が出来ない。總て此等圖畫の形式は兒童が未だ一向幼稚である間は、遊戯に最も密接なる關係を有するものであるが、長ずるに及んでは、自然圖畫も遊戯的でなく社會的分子が含まれて來るので、従つて遊戯との關係も淺薄になるのである。

デューエー氏の言葉に、美術家の、工匠と異なる點は、前者は自分の仕事の中に社會的價值を認め且つ自己を社會的効價に對する一媒介者となす、即ち自分の仕事が社會に對して効價あるやうに努めると云ふ所にある、換言すれば靴屋商人でも自

分の商つて居る靴が、社會に對してどれ丈の可能力を有つて居るかを評價する事の出来る者は、即ち美術家たるを得るのであると、始の程は兒童は同じく美術でも、所謂、美其物のための美術と實用的の美術との區別が出来ないのである、たゞ漸次に自身にとつての價值あるものと、一般にとつて價值あるものとを離して見るやうになり、又實際用に立つものと美しいばかりのものとの區別も出来るやうになるのである。幼い時に兒童が活動するのは、たゞ其の活動する事自身が喜ばしいのであつて其活動の結果が自分自身に、又他にとつて必要であるから爲すと云ふのではない、此の點は遊戯におけると同様である。故に德行も兒童自身に道德的價值があるのではなくて其行を爲す事によつて他から稱讚を受けるからと云ふので德行を繰り返すのである。若し兒童が長者の談話によつて生せしめられるのでなかつたならば兒童の虚榮心とか、又は自分の美に對する愛とか云ふもの

は、一體幾才位になつたらば發達するのであるかを考へたらば余程面白い事であらうと思はれる。恐らくかゝる事もしくは美衣を愛するとか、又は最も幼稚な場合は例外としても、已に述べた如きすべての美なものを愛する情が青年になる前に現はれる如き事は到底豫期する事は困難である。

(つづく)

『子供展覧會』に就て

倉 橋 生

此頃世の中に行はれ出した、子供に關する新事實は子供展覧會といふものである。或は『あかん坊展覧會』或は『子供大會』等の名稱の下に行はれて、大に世の新らしい注意を促して居る。その目的は兒童養育の獎勵にあつて、遠い目的としては國民の健康増進の一手段といふことである。即ち時を期し、會場をさだめて、多勢の父母がその愛兒を連れて集る。専門家諸君が審査員となつて

その子供等の健康を審査する。等級が附せられる優等なるものに賞が與へられる。斯くして、我子の健康についての注意が親達の間に喚起せられ、又兒童の養育上の知識を與へらるゝといふにある。私の思ふに、此の會が催さるゝ、此の主旨に就て、何人も不賛成のものはあるまい。「世の親達に我子の養育に就て一層注意せしめる」、誰れとて此主旨に不同意のものがあらう筈はない。私とても勿論大に賛成である。

しかしながら、此種の會の催さるゝことに就ては、遺憾ながら私は同意をもつことが出来ない。而して、私が同意なると否とは、此の會の主催者諸君及賛同者諸君にとつて、何等の關係もないことであるかも知れないが、事は我國の子供のことに關する。思ふ所を述べずには居られない氣がするのである。殊に此の種の會は、近頃行はれ、又行はれんとして居るのが第一回で、以後また再び行はれる計畫のあるといふことを聞いて居る。將